

政治と宗教

歴代誌下 28:28-29:11

賈 晶淳

小学館から出た『忘れられた殉教者』という文庫本があります。大分前に読み終えた本ですが、今回証詞の参考するため必要などころだけ読み直してみました。タイトルだけ見ますとキリシタンの話のようですが仏教の話です。日蓮宗の一派である「不受不施派」の弾圧の記録です。不受不施というのは日蓮上人の教えに従って法華経を充実に実践していくための思想でありました。法華経を認めない者には供養せず、布施を受けないという立場です。この不受不施派が誕生したのは豊臣秀吉の時代です。秀吉は天下統一の一環として当時武力を持っていた農民と僧侶の集団を解体する目的で京都方広寺の竣工の時(1595年)に仏教の諸宗派から大勢の僧侶を参加させ、「千僧供養」という開眼供養を開きます。この時日蓮宗の本山である京都の妙覚寺では秀吉からの供養参加への要請を受け入れるかどうかで賛否が分かれ、反対する側が離脱して不受不施派となります。その後、1612年キリシタンと一緒に禁止令が出され迫害を受けるようになりますが、その解除もキリシタンと同じく1871年です。ただ彼らはキリシタンと異なり、迫害を受けながらも幕府に絶えず訴えに出る行動をとりました。

今日お話ししたいテーマは「政治と宗教」です。今日は衆院選の投開票の日であり、プロテスタント教会では宗教改革記念日でもあります。このような日に政治と宗教を合わせて考えるのも意味があると思ひまして選んだテーマです。戦後の日本の政治がなかなか変わらない理由について大分前から疑問に思っていました。そして、それを日本の宗教史と関連して考えて見ることにしました。

宗教というのは個の集まりですが、時には集団として権力と同等な力を持ち、共助と牽制関係を繰返して来た歴史を世界史や聖書から学びます。例えば、聖書のモーセ五書には(律)法や制度について、また預言書には政治への批判や改革への言葉が書かれています。近現代における欧米の政治はその法的根拠や制度発展とその改革にも、聖書やキリスト教の影響を否定することはできないと思います。それと逆に宗教を徹底的に否定して来た政治史もあります。旧ソ連を始めとする社会主義国家の制度がその一つです。それでは日本の宗教史の中で政治と宗教はどのような関係であったのでしょうか。また宗教はどれほどの影響力を持っていたのでしょうか。

今日の聖書個所の背景となる時代は紀元前八世紀末、北イスラエル王国がアッシリアに滅ぼされた前後になります。南ユダ王国は侵略を免れ、アハズ王とその息子ヒゼキヤ王が統治した時です。そこには親子間の王権交代が書かれていますが、よく見ますと親子が取って来た政策が正反対の形をとっていたのが分かります。父アハズ王は神に反する政策を、子ヒゼキヤ王は神に従う政策を取っていたということです。親子間にどれほどの政策の違いがあるのかが書かれています。この時にアハズ王はアラムに頼り、アラム(現・シリアのダマスカス)の神を信仰し、エルサレム神殿の祭具をすべて破壊し、神殿の扉を閉鎖し、異教の祭壇を築いたと書かれています。28章24節です。

アハズは神殿の祭具を集めて粉々に砕き、主の神殿の扉を閉じる一方、エルサレムのあらゆる街角に祭壇を築いた。

息子ヒゼキヤ王は、父が信仰していた異教の祭壇をすべて破壊し、エルサレム神殿の扉を開き、神殿の中を浄化したということが書かれています。29章3節から5節です。

その治世の第一年の第一の月に、ヒゼキヤは主の神殿の扉を開いて修理し、祭司とレビ人を連れて来て、東の広場に集め、言った。「レビ人よ、聞け。今、自分を聖別し、先祖の神、主の神殿を聖別せよ。聖

所から汚れを取り去れ。

このように聖書には今の自民党には世襲政治家が多くそれが政治の変化を止め、逆戻りまでさせている政治環境からは全く考えられないことが書かれているのです。

それでは日本史の中で政治と宗教はどのような関係を持って来たかを不受布施派が始まった時代まで遡り考えてみたいと思います。

山本書店の創業者である山本七平の本を何冊か読みました。青山学院出身の著者は宗教にとっても関心が強く、聖書関連書籍を多く出版しています。著書には「日本教」という独自の概念を取り上げ、明治維新後に始まった天皇制の下で日本という国は日本教という一つの宗教の形を持つようになったという考え方で、共感するところが多いです。

日本史の中で戦国時代には農民の力が強かったと言われていました。豊臣秀吉も農民出身でありました。同時に仏教も武装した僧兵を持ち、農民と一緒に各地で一揆などを起こしていたようです。信長や秀吉がその農民や僧兵の武装解除のために行ったのが「刀狩り」です。刀狩りは秀吉の千僧供養から江戸初期の1614年まで一九年間続きます。また宗教との関連から見ますと、信長は1571年に延暦寺を焼き討ちし、その後に起きた石山合戦(1580年)は一向宗(浄土真宗)の一揆を圧殺しました。石山とは当時の本願寺の本山があった場所で、その跡に秀吉が建てたのが大阪城です。その意味で大阪城は政治が宗教を抑えた象徴的建物です。

豊臣秀吉は石山合戦の時に本願寺の味方をしていた和歌山の真言宗の総本山根来(ねごろ)寺を1585年に焼き討ちします。その2年後には伴天連追放令を出しています。

江戸時代となり1612年キリシタン禁止令が出され、1640年には宗門改役を設け、キリシタンではないことを証明する寺請(檀家)制度が始まります。これによって江戸時代を通し仏教のお寺は権力の手先機関となり、宗教の社会的影響力は微力のものとなります。

明治政府は1868年に「神仏分離令」を出し、廃仏毀釈、廃仏運動が始まります。そして、その3年後の1871年不受不施派とキリシタンの禁止令を解除します。それによって信教の自由の時代が渡来し、聖書でいう神殿の扉が再び開かれたように見えました。同じ年に寺請制度も廃止されますが、その代わりに氏子調べが発令されます。それはお寺の檀家を神社の氏子として登録することです。しかし、この制度は直ぐ後に始まる戸籍制度によって廃止されます。これらの一連の動きは天皇制、即ち日本教と言える国家体制を作り上げるための一環であったことです。

1872年に明治政府は仏教に対して「肉食妻帯自由令」を出します。それまで多くの仏教宗派では僧侶の結婚や肉食を宗派内の条理として来ました。これらのことは信仰上の規約に関する部分で、それを国家権力が指示し、変えることは宗教を無力化する狙いの他ないと思います。その結果、一般のお寺では世襲や私有化が進み、組織としての社会的影響力は非常に弱くなってしまいました。

また政府は1940年に「宗教団体法」を発令し、宗教各団体の単一化を強制し、その中でキリスト教は1941年に35の教派の合同によって日本基督教団が出来上がります。

このように中世から国策によって宗教が政治に対し無力な存在となり、社会に対しても影響力を失って来た歴史を見ました。

最後に結論の代わりに今日の本文の29章11節を皆さんにご紹介します。

わが子らよ、今このとき怠けていてはならない。主があなたたちをお選びになったのは、あなたたちが御前に出て主に仕え、主に仕える者として香をたくためである。(第231号・2021年10月31日証詞より)